51

「この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それとも、その両親ですか。イエスは答えられた。ただ、神の業がこの人のうえに現れるためである」

（ヨハネ福音書9章　2節3節）

人間に生じるさまざまな不幸について、人はいろいろとその起原をせんさくします。表記の生れつきの盲人についても、当時の人々は、その起原を、本人または、その両親がおかした罪の結果の罰によると考えました。今日(こんにち)でも、いろいろと、その起原、原因について解ったようなことを並びたてる宗教が多さんあるようです。

しかし、イエスは、それらの起原や原因についてせんさくは一切なさらず、神さまの慈愛そのものが現れるためと言いつつ、盲目であるがゆえに苦しむ、その盲人に親しく手を

置き、具体的に愛をもってかかわることによって癒されたのです。

「神の業を現す」とは、盲目であることの起原や原因を宗教的に、とやかくせんさくすることではありません。そのようなせんさくは結果的には、当人をますます苦しめることになります。さらに、ますます迷わすことにもなり、無責任な態度というほかありません。

「神の業を現す」とは、その人に自分が一生懸命かかわる。ということです。祈りと愛とをもって一生懸命かかわることについて、自分の愛ではなく、神のあたたかい愛を知っていただく、ということです。盲目であるにもかかわらず、盲目であることが、も早や本質的に苦ではないような喜こびと希望と力強さを当人が、一生懸命にかかわる人の祈りと愛を通し、神の愛にふれ、その神の愛の中で生きるようになることであります。

盲目だけが苦しみではありません。いろいろな苦しみが人にはつきまといます。相互に、神の業を現すようなかかわりをしたいとおもいます。

52

「よい羊飼は、羊のために命を捨てる」
（ヨハネ福音書　10章11節）

愛とは、相手のために自分を捨てる。ということにつきます。相手のために自分を捨てるということは、相手のために自分が損をするということです。

人間は、だれでも自分は損をせずに、ちょっとでも得したいと思う。しかし、人間がみんな自分は得したい、得したい、損しとうない、損したくないと思うて生きていたら、人間関係は、ギスギスなってしまいます。利己心ばっかりでは、家庭も成り立ってゆかず、近所づきあいも楽しくないし、社会は平和であることは出来ません。

愛は人間関係を幸いにかかわらせるための潤滑油のようなものです。相互に忍びあうところ、耐えるところ、謙遜であるところがなければ、相互に不幸になります。「自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」（ピリピ書2・4）とあるのも、自分が損する

ということの一つです。

自分が他人から仕えてもらうことばかり考えては、不平・不満ばかり言うことになります。「あれも、これも」と人間が他人からしてほしいと思う欲はつきないからです。仕えてあげたら他人はよろこんでくれる、そのよろこんでくれたことが、自分のよろこびとなって返ってくる。もし、このようなよろこびが相互にもてるようなつき合い方ができれば、それが仕合せ、つまり、仕え合うということです。

信仰でも、自分のことばかり祈っているようでは、本当の信仰のよろこびはもてません。他人の幸いのために祈ること、さらに、祈りつつ他人のために行為して行くところ、仕え合うところに、信仰の本当のよろこびがあるのです。

イエスさまは、そのご生涯で、愛とはどういうことかということを教えて下さり、愛がもたらす、人間の幸いを示して下さいました。そのために、先ず、自から、その愛をわたしたちひとりびとりのために生きて下さり、仕えて下さったのです。

53

「イエスは大声で〝ラザロよ　出てきなさい〟と呼ばわれた。すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた」

（ヨハネ福音書　11章33・34節）

ベタニヤ村に住むラザロはイエスの知人であります。そのラザロが病にかかって死んでしまいました。当然この知らせはイエスのところにとどけられ、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていました。

人々が、ラザロの死を泣き悲しむことによってしか癒すすべを知らずにいるさまをごらんになって、激しい憐れみを覚えられ、父なる神に祈り終えられてから、大声で「ラザロよ!!出て来なさい」と、死せるラザロに向って呼ばわり命じられると、白布を全身に包まれたまま、ラザロが墓から出て来たのです。

これは、ただ死せるラザロを生き返えらせたというイエスの奇跡物語りではありません。

この物語りが今の私に語り告げることは、すでにイエスご自身が申されるごとく、「イエスを信ずる者はたとい死んでも生きる。また、生きていて、イエスを信ずる者は、いつまでも死なない」（ヨハネ11・25）ということを、すべての人々に信じさせる証しのためであります。つまり、イエスが人間の生の根源的支配者であり、死によって代表される罪から人間を救い出し、呼び出して下さるお方であるということの証であると申せます。

イエスによって死から呼び出された者こそキリスト者であり、イエスにより死より生命へ呼び出されたことを信ずる者が信仰者であります。

54

「マリヤは高価で純粋なナルドの香油を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた」

（ヨハネ福音書　12章3節）

マリヤは、自分の最も大切なものとしてもっていたナルドの香油を、なんの惜し気もなくイエスさまの足にぬりそそぎました。こんなことは誰れもが、いつでもできることではありません。

自分が最も大切にしているものを、何の惜し気もなく与えることは出来るのには、それを与える相手への、余程の信頼と愛がなければでき得ることではありませんし、さらに、与える人の思いの内に、余程の与えるということへと、おし出してゆく迫りがなければ出来得ることではありません。

マリヤの場合何がそのようにさせたのでしょうか。イエスさまへの愛情でしょうか。その通りです。また、イエスさまへの信頼でしょうか。その通りです。しかし、イエスさまへの信頼・愛情をマリヤはどのようにしてつちかったのでしょうか。それは、第一に、イエスさまのいろいろな人々やことがらに対するかかわりをよく見、マリヤ自身も親しくか

かわったということです。第二には、イエスさまの語られることに耳を傾けたということです。即ち、よくかかわり、よくきくということは最も大切なことであります。その時、おのずと相手の真実が見えて来るし、感化され自から浄化されます。

しかし、ヤリヤをしてイエスさまに対し謙虚にさせ、畏れをいだかせ、服従させたものは、弟ラザロの死から復活であったと申せます。マリヤは、そこで、全存在のお恵みの支配である神を見たのであります。イエスさまに於てこれを見ることが最も重要事であります。

55

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」

（ヨハネ福音書　12章24節）

普通「己を虚しうする」ということは、我意、我慾をすてて、謙虚な気持になること、だと思われています。たしかに、その理解は正しいのでありますが、この理解のなかには「己を虚しうしなければならない」「己れを虚しうすることは正しいこと、よいことなのだ」と言った道徳的な力みがあるように思われるのです。

私は「己れを虚しうする」ということは、自分が力んですることではないと思うのです。それは、どこか「年寄の冷水」のようなおかしさがあります。

「己を虚しうする」とは「己れの虚しさを知る」ということだと思います。

親鸞の言葉に「超日月光をはなちて刹塵をてらし、一切の群生・光照をかふる。」というのがあります。つまり、この世のすべてのものはすべて、神の慈愛の恵みの手に支えられて在るのみ、という意味です。

実は「己れ」などないのです。あるのは「神の恵み」だけです。あるのは「神の恵みの

御手の中に生かされている自分」なので「自分が自分で在る」のではないのです。

一粒の麦が地に落ちて死ぬとは、神の大慈悲・神の愛・恵みの御手の中にあって生きていることを知る、ということです。その時人は、自分の生命が神のものとなり、神の永遠と同化している安心を体得するのであります。「も早やわれ生くるに非ず　キリスト吾が内に在りて生くるなり」

とパウロが言うところの奥義の体得です。恵みの世界への開眼です。これは己れが、己れが、また、自分が、自分がと言って力(りき)んでいる者の全くあづかり知らぬ世界、平安の世界であります。

56

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死ん

だなら、豊かに実を結ぶようになる」
（ヨハネ福音書　12章24節）

右のイエスさまのお言葉は、ものごとの道理のあるがままを素直に語っておられます。ことわざに、「蒔かぬ種は生えぬ」とありますが、たしかに多くの実を生み残すためには、その実自身がみずからを投げ出さねばなりません。

わたしたちは今日、わたしたちの多くの先人たちの自己犠牲・奉仕によって生みだされた数々のよきものにあづかって幸いな生活をなし得ているのであります。

また、今日教会がこのようにあり、わたしたちが福音信仰にあずることが出来るのは、信仰の先人たちが、そのために流した殉教の血の犠牲と献身とによるのであります。

自己犠牲による献身・奉仕なくして、一切のよきものは生まれ生れ出ずることはできません。

この道理は、個人生活に於ても当てはまります。人は自からをみがくことによって、そ

の徳を得るのであります。みがくとは、すりへらし、捨てることであります。また、人はみずからの生を燃えきることによって、ことは完成し光りかがやくのであります。錆ついた人生は滅び以外のなにものでもありません。

この道理は、神との関係に於てその道理の道理たる所以を発揮するのであります。即ち、わたしたちが、まことの平安、まことの希望・永遠なるものに生きるためには、自分の人生・自分の存在、自分の生命を、神の愛の手の中に投げ込むことであるとイエスは申されます。投げ込むとは信ずるということであります。今日も明日も一年後も、老いも、死をも死後をも、神のご慈愛の手の中にあることを信ずることであります。

57

「光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」

（ヨハネ福音書　12章36節）

イエスさまは、ご自分のことを「世の光である」（8・12）と申されました。世の光であるイエスさまのご慈愛は、すべてのものを照らすまことの光であります。（1・9）その光はすべてのものに及び、太陽の光によって、生命がはぐくまれ育つように、光なるイエスさまのご慈愛は、すべてのものに希望とよろこびの生命を与えます。

わたしたちは光を見ることは出来ません。しかし、光を受けているそのものを見ることによって、光を見ることが出来るのであります。イエスさまの数多くの人々に対するご慈愛の事実を通し、そこにイエスさまの慈愛の光を、じかに見ることが出来ます。世の光であるイエスさまのご慈愛は、久遠の光であります。いつまでもつきぬ光であります。また、それは、すべての人々に及ぶ故に無偏であり、さらに無辺でもあります。

わたしたちは、光に於て、やみをはじめて知り得るのです。やみの中にいる者は、やみそのものを知ることは出来ません。やみの中の子は、やみを知らず、ましてや光など全く

知りません、しかし、光に於てわたしたちは、やみを知るのです。そしてやみは、やみ自身で追放することは出来ません。光のみが、やみを追放することができるのであります。やみの最大の恐れの対象は光であります。

イエスさまに於てこそ、わたしたちは、自からのやみ性を知り、その暗らやみの中から脱出が出来るのであります。

表記の「光を信じる」とは光によりたのむということであり、「光の子」とは、光にみたされた者ということであります。

58

「わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう」

（ヨハネ福音書　12章40節）

宗教とは〃宗とすべき教え〃であります。その〃宗〃とは〃心根〃である、とある人が申されましたが、なるほどと思います。即ち、心根とは、人間生活の中心思想であり、根本精神となるものであります。

では、宗とすべき教えとは何かと申しますと、聖書に於ては、イエスさまに於て明らかに示された神の一方的な大慈愛そのものの現実、これこそ教えそのものであります。どうあっても救って下さろうとする神の願い心、愛の心とその御手が、教えそのものであります。ですから、〃神の教えはただの言葉でなく、力である〃とイエスさまは申されるのです。その神の教えを己れの宗、即ち心根として生活すること、これが宗教生活であります。

表記の「神の言葉を受けいれる」ということは、先に述べた通りの〃教え〃を、自分の生活の宗、即ち心根として受けいれ、その上に己れの生活をのつけて生きることを言うの

であります。

この世の生は必ず滅びます。人は必ず死にます。その時になってその人が、いかなる教えを宗として生きて来たか、ということが一大事として生じるのです。

「わたしの言葉が終りの日にその人をさばく」とイエスは申されます。よく注意したいことは、イエスがさばかれるのではありません。神がさばくのでもありません。いうなれば、人の死後にはじめて、イエスの言葉、つまり先述の教えが、おのずと効を発するということであります。それは日中(ひなか)につけている電気の明りが夜になって、おのずとその明るさの効を発するように。ですからイエスは申されます。「わたしに従って来る者はやみのうちを歩くことなく、命の光りをもつであろう」(ヨハネ8・12)と。

59

「イエスは、夕食の席から立ち上がって、上

着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふきはじめられた」

（ヨハネ福音書　13章4節）

『ある武士、一遍上人（時宗の開祖）を迎えて歓待したのを、傍らに人あって「あれはいかなる僧であるか」とたずねたのにたいし「なんの徳もない僧であるが、その教える念仏が真実であるから」とこたえた。上人それを聞き伝え、その武士の「法によりて人によらざる」ことをふかくよろこばれた。』とある文章に記してありました。

イエスさまはなぜ弟子たちの足を親しく、ひとりびとり洗われたのでしょうか。ひとは互いにその足を洗ってあげるような心持で交じわらねばならない、ということの教訓を自からお示しになったのでしょうか。たしかにそれもあるでしょう。しかし、イエスさまが、洗足に於てお示しになったことは、神のご慈愛の広さ、大きさ、深さそのものであります。即ち、神の真実であります。

今やイエスさまを裏切って、罪なき命を敵の手に売りわたそうとしているイスカリオテのユダの足をも、イエスさまは慈愛あふるる御手で親しくユダの罪を拭うが如くに洗って下さる。また、己れの身の安全のためにイエスさまをすてて、やがて逃げ去る弟子たちのその足の汚れを洗いおとして下さる。これこそ神のご慈愛であります。

すべての人々を神の大慈愛の中に抱きかかえて下さる。この真実を、イエスさまの洗足に於て体得することこそ、イエスさまの最終の願いであったのです。

しかし、この神のご慈愛への開眼の機縁を空しく気ずかずしてすごす者の人生は、正に空しいと申せます。

60

「あなたは、わたしの行くところに、今はついて来ることは出来ない。しかし、あとにな

ってから、ついて来ることになろう」。
（ヨハネ福音書　13章36節）

人間は神に願いをかけられた存在であります。人間にかけ給う神の願いとは、神の大慈愛に目ざめ、その大慈愛の中に自分をそっくり全部置いて生きることであります。これが、神のご支配の中に生きることであり、また天国に生きるということであります。このように神の大慈愛の中へと招ねかれているところが人生であり、生きる意義であります。

しかし、神の大慈愛に目ざめ、それへの招きに気ずくことは「我」に固守している人間には、とてもむつかしいことであります。とは申せ、このような人間も、他人の恵を見、自分の虚りに気ずき、人生の虚仮不実であることを知るに及んで、そのことを機縁として、神の大慈愛に開眼させられるようになるのです。

表記の聖書の言葉は、ペテロに向って語られたイエスさまの言葉ですが、「……今はついて来ることは出来ない……」と申されました。これは「今はあなたにはわからない」と

いうことです。「しかし、あとになって、ついて来ることになる」とイエスさまは申されます。たしかに、ペテロはその後多くの失敗をし、みずから打ちひしがれ絶望します。そのとき、数多く聞いたイエスさまの教え、イエスさまの行いがよみがえって来て、神さまの大慈愛に開眼し、そこに自分の生死を置くようになるのです。

「我」の強いわたしたちは多くの失敗をします。しかし、それを少しも恐れることはありません。大切なことは、失敗しつつ、たえず、イエスさまの言葉を聞くことで直ちに信を得ることを求めてはならない。聞くことにみち足りるつみ重ねの喜こびに止まるとき、必ずやがて、大慈愛に開眼させられる時が来ます。

61

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

（ヨハネ福音書　14章1節）

なんと自分の内も外も騒がしいことかと思う。

人がつくり出す物理的な騒音もさることながら、それにも増して騒がしいのは、自分の内なる思いが生み出す騒音であります。

内なる騒音についてイエスは次のように申される。

「すなわち内から、人の心の中から思いが出て来る。不品行・盗み・殺人・姦淫・貪欲・邪恵・欺き・好色・妬み・誹り・高慢・愚痴」（マルコ7・21）まことに、これらは騒音中の騒音であります。わたしたちの生存の車輪は、これらの騒音を内から外えと出して走りつづけます。それは、いかにも制しにくい騒音であり、己れ自身のみならず、周囲に害をふりまき狂気に人々を追いやり感化するものであります。

「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」王陽明ならずとも、自己を省みてつくづくと思います。

しかし、その騒音の只中へ、否、只中でイエスは「あなたがたは心を騒がせないがよい」と申される。そして「神を信じ、わたしを信じなさい」と言われる。

「信じる」とは、自己のはからいではない。己れが改めることではありません。「信じる」とは投げ込むことである。ゆだねることである。否、むこうから手をさしのべていただくことを見ることであります。

「あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい、そうすれば、人知ではとうてい測り知ることができない神の平安が、あなたの心と思いとをキリスト・イエスにあって、守るであろう」（ピリピ4・6・7）

62

「あなたがたのために、場所を用意しに行く。そして、行って用意ができたならば、またき

て、あなたをわたしのところに迎えよう。」
（ヨハネ福音書　14章2・3節）

右のイエスさまの言葉は、これを聞く者すべてに限りない慰めと平安とを与えて下さいます。なぜならば、この言葉は、わたしたちに生死を一つの生にして下さるからです。

安心とは、自分の居る所がハッキリしているということです。不安とは、自分の居る場所がハッキリとしていないということです。

わたしたちはこの世で生きている間は、一応だれでもが自分の居場所がハッキリとしているので安心しています。勿論、明日の自分の居場所や、さらに老後の自分の居場所についてゐ不安は誰れもがもっています。しかし、それにもましも、わたしたちにとって全くわからないのは、自分の死後の居場所です。それについては、あたかも暗をさぐるようで、見通すこともできず、見当のつけようもありません。

ところが、イエスさまは、それについては何一つ心配はいりません、安心しなさい「あ

なたの居場所を用意しております」と約束して下さったのです。そればかりか「迎えに来てあげます」ともおっしゃるのです。イエスさまのお言葉を信ずるものにとっては、生から死へは、明から暗へ、ハッキリした居場所から何もワカラナイ所へ、ということではなく、明から一層の光明へであり、ハッキリした居場所への転出であり、出立であるのです。それは生から、より光明の生への栄転なのです。イエスさまのこのお恵みの賜物にあずかる者にはも早や生死はなく、生のみある人生となるのです。ですから、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、わたしを信じなさい」と申されるのであります。

63

「わたしのおる所に、あなたもおらせるためである」

（ヨハネ福音書　14章5節）

人が生きている限り必ずそこに死が訪れる。このことは未だ曾て、誰れに対しても訂正されたことはない。死は必ず、誰れに対しても平等に、いかなる手加減もなく訪れる。故に、人は死を恐れ、悲しみの中に沈む。

考えてみると、生きるとは死の中の束の間の出来ごとのように思えたります。つまり、生きる中に死があるのではなく、死の中に生があるようです。

しかし、聖書はイエスの出現と共に、「暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」（マタイ4・16）と宣言しました。

又「光は、やみの中に輝いている。そして、やみは、これに勝たなかった」と語ります。

「すべての人を照らす、まことの光」として来り給うたイエス・わたしたちの生も死も、その手に握り支配し給うイエスは、「あなたのために場所を用意する」（ヨハネ14・3）と約束して下さる。わたしたちが肉体的に死して後、わたしの場所が備えられている。居場所がある、指定席がある、というのであります。「そこへ迎え案内する」（ヨハネ14・3）と申されるのです。そことは、居場所とは、イエスが居られる所、愛と慈愛に充ちて

いるその所、だと申される。

それ故に、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、わたしを信じなさい」（ヨハネ14・1）と語りかけて下さるのです。

安心して生きようではありませんか。安心して死のうではありませんか。

64

「わたしは、ぶどうの木。あなたがたは、その枝である。」

（ヨハネ福音書　15章5節）

わたしたちは自分を、あたかも一本の木が大地に立っているように、一人でこの世に立っているものだと思っています。

しかし、イエスに在る信仰に生きるということは、一本の木として大地に立つことではなくて、神という農夫の愛情豊かな世話のうちにあるイエスという幹に連なる枝として、農夫なる神、幹なるイエスに支え育てられているということなのであります。

大切なることは、農夫なる神、幹なるイエスを信頼して、それに自分を一本の枝として、しっかりと連なっているということです。その時、枝はおのずと養分をいただいて育ってゆくのであります。

ですからイエスは、「わたしにつながっていなさい」と申されるのです。また、「わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない」と申されます。

信仰とは、枝として一本立ちすることではなく、幹につらなる枝となることです。

しかし、この話はたとえ話です。幹につなっているとは、イエスの愛、神の愛を信じて生きる、ということにほかなりません。（15・9）

イエスの愛を信じ、神を仰いで生きる者には恐れはありません。

65

「わたしの愛のうちにいなさい」

（ヨハネ福音書　15章9節）

「名利と愛欲とは人間の骨身であり血液である」と言った人がいます。たしかにその通りであります。ですから、名利を求めないという人も、名利の心がないのではなく、また、愛欲にふけらないのは愛欲の情がないからではありません。それらは、ただ少しく、その求むる心と耽る情とに節度をもつものにほかならないだけであると申せます。

わたしたちは日頃、「あのような人が」と驚ろくような事件に出くわすことがあります。どのような人も、いつアッと驚ろくような振舞に走らないとは限らない危うさをもっているのであります。

「わたしのうちには、善なるものが宿っていないことを知っている」とパウロも告白しました。そして「わたしは、なんとみじめな人間なのだろう」と完全なる敗北宣言を行い

ます。正に人間は濁悪不善なる者、罪人以外の何者でもありません。「その臨終の一念にいたるまで」このおもいは「消えず、絶えず」あるのであります。

一体このような人間のうちからいかなる「善なるもの」が生れいずるというのでしょう。このような人間のうちに、どれほどの愛があると申せましょうか。このような人間が、いかにして自分の力にて救い出せましょうか。

イエスさまは「「わたしの愛」のうちにいなさい」と申されます。「濁悪不善」なる人をも、それ故に救うて下さる神の愛なる「わたしの愛」のうちに生きよ、と言われるのであります。

信仰とは、この愛のうちに自分を投げ込むことであり、この愛を深信すること以外にないのであります。

66

「あなたがたは、わたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。」
（ヨハネ福音書　15章14・15節）

神のお恵みを知らされ、そのお恵みのもとで共に生きている者は、私（イエス）の友（仲間・協力者）である、とイエスは言われます。

イエスは、神の恵みのもとで自覚的に生きる者は相互に仲間・協力者という意味で「友」と申されます。

「私の先生は○○だ」「×××は私の弟子だが△△は○○の弟子だ」などと言った小さな人間的派閥の関わりに捕われて、相互にかかわっているのは全く馬鹿げたことであります。

「〃先生、わたしたちについて来ない者がいましたので……イエスは言われた〃わたし

たちに反対しない者は、わたしたちの味方である」（マルコ・9・38～40）

イエスの思いは大きい、常に根本を見すえて語り行為し給う。

「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるる」と言ったのは親鸞であります。自分について来るから、そのものだけが友なのではない。たとえ自分から離れていっても、その者が、神の恵みに他の所で生きるなら、それは友、即ちキリストにある協力者、仲間なのであります。故に、自分のもとから去る時が来て去る者は、黙って見送ればよい。

己が教会・己が教団・己が宗派的主張にとらわれ、それを誇ったり、そこを去る者を悪者あつかいしたりする者があれば、聖書信仰の何たるかを全くわきまえぬ愚か者であります。

神は、愛をもって召し、必要に応じて配分し給うのであります。

神にある友を、己が弟子として定めたり、神の友たる己れを忘れ、一人の師を誇るなどしてはならぬことです。但し師弟の道は、その間にある。

67

「あなたがわたしを選んだのではない。
わたしがあなたを選んだのである」
（ヨハネ福音書　15章16節）

自分があって神の愛があるのではない。先ず、神の慈愛があって、その御手の中に自分が保たれ、生かされているのであります。

わたしたちが正しく生きているので、神がわたしたちを愛し救って下さるのではない。神はわたしたちが正しかろうが、正しくなかろうが、それには一切関係なく、わたしたちを愛し救うて下さろうとされるのであります。

即ち、神は、わたしのあるがままの姿で救いあげて下さるのであります。故に神は愛なのです。

喜んでいる者は、喜びの中で手を合せ祈るとよい。また悲しんでいる者は、悲しみの中

で手を合せて祈るとよい。いずれも、神の大慈愛の只中に在ってのことゆえに、神の愛護は少しも変わらず同じなのであります。ですからイエスさまは、「あなたがたが、わたしの名によって父なる神に求めるものはなんでも、父なる神は与えて下さる」（16）と申されるのです。

このような神の愛があるものすべてに先だって、まぎれもなく在るということの感得深信発見こそわたしたち人間にとって根本的な重要事なのであります。

このような意の用い方を、自分の周りのすべてのことがらの根本に到らせていることを「用意周到なる人生」というのであります。

このような信仰の護得は、その人に落ちつきを与え、喜こびを与え、その心さわぐ時に平安を得しめるのであります。さらに、友とのかかわりに愛を生ましめる要因ともなるのであります。

68

「人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更に、あなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。彼らがそのようなことをするのは、父をもわたしをも知らないからである」

（ヨハネ福音書　16章2・3節）

表記のイエスさまのお言葉を読むとき、きまって思い出す一文がある。これです。即ち、「かたんと一筋におもふも病也・兵法つかはんと一筋におもふも病也。習のたけを出さんと一筋におもふも病也。かからんと一筋におもふ病也。またんとばかりおもふも病也。病をさらんとおもひかたまりたるも病也。何事も心の一すじにとどまりたるを病とする也」

これは柳生新陰流兵法家伝書にある一節でありますが、ここには「このようにしなけれ

ば」「あのようにしなくては」「これである」「あれである」と剣の作法の指導書にかじりつき、人の計いによって生み出されつくられたことがらを、全く正しいと自から信じ込み、一心に歩む者の誤りを「病也」と指摘しています。

何ごとも、その熱心さの余り、人の分別、知恵で生み出した主義や主張を絶対視して自分をも他人をも、その枠にあてはめ、しばろうとすることほどおろかで恐ろしいことはありません。

それはあたかも、よく見ようとしてその実、いろいろな色メガネでものごとを見るようなものです。そこで見えるものは、本当の色ではありません。

本当の色は、実はよく見ようと計うところの色メガネを一切すて去るときにこそ、それを見ることができるのであります。

「わたしは自由を得させるために来た」とイエスさまは申されますが、色めがねをかけねばと一心に力むことからの自由であり、イエスさまを見あげる時、この世のまことの姿がハッキリと見えるようになって来るのです。それがまことの救いまことの平安の世界で

す。

69

「あなたがたは、この世ではなやみがある。
しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに
世に勝っている。」
（ヨハネ福音書　16章33節）

幾多のなやみがあるのが人生であります。なやみなき人生などというものは、本当の人生ではありません。

照る日ばかりが日日ではありません。日日とは雨の日あり風の日あり、雲りの日あり照る日がある。それが本当の日日であります。

人生に於て、なやみを消しさらしめようとすることは、あたかも、その日日から雨をとり去り、風をとり去り、曇りをとり去るようなものであります。しかし、そうした照る日ばかりでは、日日そのものが続くことが出来ません。

人生に於て大切なことは、そのなやみをいかに受けとめるかということであります。

人が、そのなやみの中で泣き言をいい、愚痴をこぼし、不平をいい、繰り言ばかしでいるならば、その人はおそらく一生の間、不平に不平を言い、破綻を重ねて、やたら人生を過すことになるにちがいありません。

しかし人が、「生やそれに依り、死やそれに帰す」ところ、即ち、己が生死の帰依するところを信じ仰ぎ知っているならば、人生に於けるなやみは己が人生の修行の場であり、恵の時と感得せしめられるのであります。

「神はご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」（ロマ8・28）

現実を見て神の愛を見るのではなく、神の愛を見て現実を見る。これが信仰人の人生に

対する態度であります。

70

「時がきました」

（ヨハネ福音書書17章1節）

「すべてのわざには時がある」と伝道の書は申しています。たしかに、かたいつぼみも時いたれば花となり、やがて実をむすぶにいたります。これは、人がつくり出す時にあらず、天の時・神の時がなせるわざであります。

人が神の時を待つことなくつぼみを開けば、花のいのちは失われ、その実をも得ることは出来なくなります。

しかし、わたしたちは、いくたびも、この愚かをくりかえしおかしてしまいます。待つことに不安を覚え、何ごとに於ても早く得ようと策をねり、さまざまの計いをもちます。

イエスさまは「わたしの時はまだ来ていません」（ヨハネ2・4）と言って、神の時を己が計いの時で犯されませんでした。

たしかに、神の時は私たちの計いの時を越えて、わたしたちを支え動かします。しかし、その神の時に備えて用意を欠いてはなりません。花を咲かせ、実をつけるには、その樹木の日日の管理が必要であります。

わたしたちにとって大切なことは、日々の努力、日日の求道であります。「信仰は聞くことによる」（ロマ10・17）とパウロは申しましたが、神さまのお恵みの発見は、ただ日々「聞くこと」であります。「聞く」という日日の己が時のつみ重ねが、神の時を現前さすのであります。時が来れば必ず刈りとることになるのです。（ガラテヤ6・9）

「神のなされることは皆その時にかなって美しい」。（伝道の書3・11）待つことによって、空しいと思う日日の求道によって、「神の時」の美しさを見い出すことが出来るの

であります。己れの計いの時によって生きようとするわたしたちには、神の時は見えません。しかし、「わたしの父は今に至るまで働いておられる」（ヨハネ5・17）とイエスさまが申される如く今も働く慈愛なる神の時にみずからをゆだねたいものです。

71

「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであります。」

（ヨハネ福音書　17章15節）

これは、弟子たちのためのイエスさまの祈りであります。さまざまな問題があるこの世から逃げ、それらを避けて人生を過すことをイエスさまは祈られない。イエスさまは弟子たちが、この世のただ中で、さまざまの問題にぶつかり、それらと取りくみ、みごとに克

服することにより、神の慈愛のもとに生きる者の栄光を、世の多くの人々に示し語れるようにと祈られるのであります。この世から逃避すること。この世に順応すること。それらは信仰の敗北以外の何ものでもありません。

わたしたちが、神の慈愛の大なることを知るためにも、また、世の多くの人々が神のご慈愛の大きさに眼をひらくためにも、神を仰ぐ者は、さまざまな問題があるその只中で、神を仰がねばならないのであります。

苦しみあり、悲しみあり、よろこびあり、楽しさあるその日々を過し送ることにより、そこに神の支配の道理・神の恵み深き計いを信仰人は見出し、より一層に神の恵みの深みに入って行くことができるのであります。

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネ16・33）

苦しみ・悲しみ・たのしさ・よろこびを通し、その只中で、すでに世に勝（まさ）っていい給うもの、そしてご支配していい給うものを、一層に確めると共に、それを世の多くの人々に語る

ような希望の生活のためにイエスさまは祈られたのであります。

72

「わたしのいる所に一諸にいるようにして下さい」

（ヨハネ17章24節）

これは、わたしたちについてのイエスさまのお祈りであります。

「わたしのいる所に一諸にいるようにして下さい」とは人々が死んだ後、イエスさまがおられる天国に一諸におられるようにして下さい、というのではありません。

「わたしのおる所」とは、神さまの慈愛ゆたかな御手の中という所であります。その所は、いつでも、どこでも実は、わたしたちが、心の目をしっかりと開けさえすればハッキ

リ見ることができる現実そのものであります。

神さまは、悪い人にも、良い人にも太陽を照らし、雨をふりそそいで下さいます。（マタイ6・45）とイエスさまが申されるとき、それは、わたしたちの考えや行いなどの一切に関係なく、それらをはるかに越えて、今、現にかかわっていて下さる神さまのご慈愛の御手の働きを示して下さっているのです。

このまぎれもなく現に在るところの神の御手に気ずくこと、これこそ、人間として日々生きている者にとって最も大切なことなのであります。なぜならば、すべては、その所から出て、その所に帰って行くからです。

イエスさまは、この神の慈愛の御手の中にいるご自分の、その立場から、この世のすべてのことがら、または、人々をご覧になって語り行為をしていられるのです。

しかし、その所に立てず、その所に目ざめていない者にとってはイエスさまは人間の理想を語ったり、非現実的な理解できないことがらを語っていられるように思えるのです。わたしたちは、イエスさまが祈って下さるように、神さまの慈愛の御手が、まぎれもなく

今、ここに現に在ることに開眼させられそこに自分の生を自覚的に置いて、その日々を歩みたいと思います。

73

「剣をさやに納めなさい。神がわたしに下さった杯は、飲むべきではないか」

（ヨハネ福音書　18章11節）

思いがけぬこと、予期せぬこと、さらに、どうしょうも出来ぬことが起り、わたしたちを悩ませ、苦しませます。これが、まぎれもなく人生そのものであります。このような人生をほかにしてわたしたちの人生はないのであります。

しかし、わたしたちは、苦もなく悩みもなき人生そのものを生きたいと願い求めます。

が、そんな人生はどこにもありません。

それならば、人間には幸いな人生がないのかというと、そうではありません。幸いなる人生はまぎれもなく現実にあるのです。その現実とはどこか、実は、悩みあり、苦しみある人生の只中にあるのであります。

幸いなる人生とは、わたしたちが頭で考えて知るものではなく、人生の体験から体得することであります。しかも、それは、悩みあり、苦しみのある人生を生活することによってのみ体得的に知らしめられるのであります。

たとえば、白の世界は、白の世界の中だけにいては白の中にいながら、その白が見えません。しかし、白の世界の中で黒に出会い、赤に出会うことによって、はじめて白の白であることがハッキリと知ることができるのです。

これと同じように、わたしたちの人生の真実なるありがたさ、人生におけるおめぐみそのものは、人生に於ける悩み、苦しみに身を処することによって、人生そのものがお恵みのもとに在ることに開眼させられるのであります。ですからイエスさまは、苦しみ

の杯を自から受けられたのです。それによって復活という、神さまのまぎれもない現実に働く力を身証し、わたしたちに示し語って下さったのであります。

74

「わたしの国は、この世のものではない」

（ヨハネ福音書　18章36節）

表記の言葉は、イエスさまがユダヤの総督であるピラトの質問に対して答えられたものです。

「わたしの国はこの世のものではない」とは、どういう意味なのでしょうか。ピラトは、このイエスさまの言われる意味を理解することができませんでした。わたしたちもピラト同様、この言葉の意味を仲々理解することができません。

イエスさまは、決してむつかしいことを申していられるのではなく、実に単純でかんたんなことを語っておいでになるのです。

その意味するところはこうです。即ち「わたしは、皆さんのように、この世のものの考え方や立場に立って、見たり、言ったり、考えたり、行動したりしているのではありません。もっと確かで、安心出来るところに立って、すべてを見・考え・語り、行動しているのです」と。

わたしたちが立っているところとは、一口に言って「我」の世界です。「我」の世界とは、自分の目・耳・口・鼻などの身体の五官でふれ感じることのみを本当とし、自分の考えで納得することだけを受けいれている世界のことです。つまり、自分の身体の欲にしばられ、自分の考えにしばられている者こそ「我」の世界に在るものです。故に、「我」の世界は、自己主張の世界であり、自己欲望の世界であり、相互の争いが消え去ることなく続く世界であります。そして強い者、もてるものが勝ち、敗れた者は小さくなって生きねばならぬ世界です。

しかし、イエスさまは、この安心できない世界を、根本から抱きかかえてい給う、神の大慈愛を、「我」にしか生きられない人間世界の向う側に見ておられ、ご自分を、その大慈愛の只中において、安心しつつ、「我」の世界に生きて「我」を越えた世界を語り示しておられるのです。

「わたしの国は、この世のものではない」とは、そういうイエスさまが立っていられる世界を語っていられる言葉なのです。

75

「兵卒たちは、イエスを十字架につけてから、その上着をとって（くじを引いて）四つに分け、おのおの、その一つを取った」

（ヨハネ福音書　19章23節）

ことわざに、〝欲には目見えず〟というのがあります。それは、欲に目がくらむと物事の是非・善悪の判断がつかなくなることを言ったものであります。

欲には肉欲・物欲などがあり、たえず身体や心を悩ませ、かき乱し、煩らわせ、惑わし汚す作用をし、仏法ではこれを人間煩悩によって生ずる根本とし、聖書はこれを人間の罪によって生起して来るところと語っています。

たしかに、人間はなんと欲にふりまわされやすき者であることか、わたしたちは日々それをなまなましく体験しつつ生活しているものです。

しかし、イエスはその欲を捨てよ!!とは申されません。欲と対決して欲を克服せよとも申されません。〝欲には目見えず〟とあるごとく、それは、わたしたちにとって容易なることではありません。わたしたちの努力や修行で、のり越え得るほどのたやすきことではありません。それが証拠に、わたしたち自身の生活を深く反省すれば、すぐにわかることです。

わたしたちは、すぐに〝目見えず〟になります。自分自身「いや」になるほど、そうな

ります。

わたしたちにとって大切なことは、その自己自身をみつめることです。ありのままの現実の自分をみつめることです。どうしょうも出来ない自分自身をみつめることです。このなさけない自分に泣くことも大切です。しかし、もっと大切なことは、この、なさけない自分が、それにもかかわらず生きている、ということのすばらしさに目ざめることなのであります。それはも早や、生きているのではなく、生かされているということにほかなりません。この自覚こそ、わたしたちを本当に力強く生かすものとなるのです。信仰のめぐみとは、これであります。

76

「イエスは、母にいわれた、〝婦人よ、ごらんなさい。これは、あなたの子です〟それから

ら、この弟子に言われた〝これはあなたの母
です〟」
（ヨハネ福音書　19章26・27節）

イエスさまは、なぜ、ご自分のお母さんを〝婦人よ〟とお呼びになり、さらに、弟子たちを〝あなたの子である〟と申されたのでしょうか。また、弟子たちに〝これはあなたの母です〟と言われたのでしょうか。

この世に於て脱し難きことの一つが肉親の情であります。特に、親子の情は、ひとしおに断ち難きものであります。〝身を惜しみ、命を惜しむを「凡」という、妻を愛し、子を愛するを「夫」という〟つまり、この情にふりまわされて生きる者が、「凡夫（ぼんぷ）」であり、正に、わたしたちは「凡夫」そのものであります。

しかし、イエスさまは、この凡夫を超えていらっしゃる。というより、凡夫より深いところに立っていらっしゃると申せます。

実は、このイエスさまが立っていらっしゃるところが本当の人間、本当の自分が立つべ

きところであると思います。そこそが人間が人間らしくなり、自分が自分らしくなるところなのです。ですから、そこを見るとき、人間は平安を覚え、自分は安心を感じるのです。また、わたしたちが自分の心の最も深いところで覚ゆる感動というものも、そのところにふれ見るときであります。

もう少しげんみつに申しますならば、わたしたちの本当の自分は、すでにはじめからそこに立っているのであります。どうにもこうにもならないこの自分のその奥の奥の突き当りの自分は、そこに立たされているのです。イエスさまは、その自分を生きることにより本当の人間、本当のわたし自身の発見を語り示し給うたのです。その一つの言葉が、表記のイエスさまの言葉であります。

77

「イエスは〝すべては終った〟と言われ、こ

うべをたれ、そして霊を委ねられた」
（ヨハネ福音書　19章30節）

これは、イエスさまのご生涯の最後のお姿であります。

イエスさまのご生涯は、人間として見るべきものを見、立つべきところに立って、見るべきものを語り、立つべきところを示し、それを生きられたご生涯でありました。

見るべきもの、立つべきそれとは一体何なのでしょうか。それは、自分自身を含めたところのすべての存在、ありとあらゆるものが、そこから出て来て、そこへ帰って行くそこのところであります。

イエスさまのご生涯は、すべての存在が帰依すべきそこを生き語り示すことでありました。帰依すべきそことは、生の依りどころ、生命の帰するところであり、これ即ち神の御愛そのものであります。

神は愛である。と聖書は申します。神があって、そこから愛がでて来るというのではあ

りません。神が愛であり、愛が神だということです。愛といわれるそれがみなぎっている。その愛をイエスさまは生きられ、その愛を語られ、その愛をお示しになられたのです。そして、その愛こそわたしたちの依りどころ、依って来たるところ、わたしたちをわたしたちとして支えているところなのであります。

わたしたちは愛がありません。うそつきであり偽善者であり、いいかっこしであります。にもかかわらず、その愛が支え、つつみ、その愛に帰って行くとしたなら、今日の一日一日は感謝でいっぱいになります。イエスさまは、そこを生き、そこを示し、そこへ帰って行かれたのです。

78

「見ないで信じる者は、さいわいである」

（ヨハネ福音書　20章29節）

イエスさまは、見ないで信じる者はさいわいである。と申されました。なぜなのでしょうか。考えてみると、見て信じるということは、当然と言えば当然です。手でさわり、口であじわい、知識で理解し、その結果、それを納得し認めて信じる。これはあまりにも当り前のことであり、も早や、これは〃信じる〃などと言う必要なきことであると思われます。

〃信じる〃ということは〃まことの行為〃という内容があるように思います。信じる心とは「真実(まこと)の心」そのものではないでしょうか。

人が「わたしは、あなたを信じます」と言うとき、相手のまことを受け容れているこちらがわのまことの表明であります。

まことをまこと心で受け容れるということが「信ずる」ということであるとすれば、イエスさまが「信ずる者は、さいわいである」と申される意味がよくわかります。

トマスという人は「わたしはこの手でふれ、この目でよく見定めるまでは信じない」と申しました。罪深い人間の代表のようです。わたしたちの代辯者のようです。このような

人間関係からは、まことあることは、何一つ生れては来ません。ましてや、神さまのご慈愛など悟ることは、とうていできません。

まことをまこと心で受け容れるとき、まことが本当に身につく。信ずるとは、まことを受けいれることでありますが、それは同時に、まことの中へ己れを入れるということでもあるのです。まことに己れをゆだねるまこと心が結局信ずるということであると申せます。

79

「あなたは、わたしに従ってきなさい」
（ヨハネ福音書　21章22節）

なぜ、イエスさまは「あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われたのでしょう。それはほかでもなく、わたしたちがイエスさまの教えを、第三者の立場から聞いたり、読ん

だりしないためであります。第三者の立場に身をおくということは、あたかも観客席にいて、あれこれ考え批判し理屈を言う人のようなもので、それではいつまでたっても、イエスさまの教えは解るものではありません。

イエスさまの教を領解する者とは第二者となって聞く者であります。従って、聖書は記された文字として読み思想するのではなく、わたしに語られた言葉として、わたしが聴く。これが大切なのであります。それ故に「信仰は聞くことによる。聞くことはキリストの言葉から来る」（ロマ10・17）とパウロは申しました。

さらに、聴くとは、語られし言葉を通じて、語らんとするこころ、精神を聞き、思うということでなければなりません。でなければ「あなたは聞くには聞くが決して悟らない」（マタイ13・14）ということになります。

そして、さらにすすんで聴くとは、語らんとするこころ、精神を自分の身に得ることを修し、行ずるに至って、ついに、本当に聞いた者となるのであります。即ち、聞き、思い、修し、行ずることによって得るのであり、その結果「得」るがその人の「とく」「徳」とな

るに至るのであります。

「あなた」と語り下さるその言葉に「わたし」として応え、聞き、語られる言葉の、そのこころをわたしのこころとされるように聞きたいと願うものです。